

岩松院本堂大間天井絵鳳凰図の制作工程と技法画材

——北斎が天井絵を描いた——

山内 章

一 はじめに

岩松院(長野県上高井郡小布施町)本堂大間天井絵「鳳凰図」の制作過程を記す資料として、葛飾北斎が描いた小下絵と作者不詳の中下絵が伝わっている。天井絵の画面には落款は無く、天井絵の制作年代等を記した文書類は今のところ見つからない。天井絵の作者についての論考はこれまで幾つか発表されているが、絵画制作面からのアプローチは極めて少ない。筆者は、天井絵制作の工程と技法画材から作者像を探り、葛飾北斎が天井絵を描いたことを明らかにしたいと考え本稿を執筆した。

二 天井絵の概要

鳳凰図は、間口(桁行方向)六^{トメ}三〇^{センチ}、奥行(梁行方向)五^{トメ}五〇^{センチ}の天井に白土下地を施し膠絵具で彩画されている⁽¹⁾。天井画面は間口で四区画、奥行で三区画に分割される。床面に天井板全体を並べ鳳凰の図柄を線描した後、区画に分割して彩色し尾羽の長い線を描くときは区画を並べて制作した。鳳凰図は完成後に天井に取り付けられた。床から天井までの高さは約六^{トメ}で、仰向けになり見上げると鳳凰全体が視界に入り、天上

界から舞い降りるような臨場感に圧倒される。

三 制作工程

天井絵の制作工程は次のように推測される。

- ① 高井鴻山の制作依頼に応じて北斎が小下絵を描く。小下絵(エスキース)は構図や配色を検討した本絵の縮小版で、この過程で作品のイメージができあがる。
- ② 小下絵を基に中下絵を制作する。中下絵は本絵に拡大するための下絵で、白線描の鳳凰図に碁盤目を書き入れた図(写真1)が北斎館に寄託されている。
- ③ 数枚の板を接いで1枚の画面を作る。板の接ぎ目はV字型の仕口で接合され、分析結果から接着に膠が使用されていたことがわかった。
- ④ 床に並べた天井板に中下絵と縦横同比率で線を引く(碁盤目線は木地に残っていない。消すことのできる木炭で描くか水糸を張ったのではないかと推測される)。大まかな碁盤目は構図全体のバランスをみる程度の役割と考えられる。
- ⑤ 碁盤目に沿って中下絵を拡大した鳳凰図を大まかに描く。鳳凰図全体と細部のデザインは描き直しが容易で消すことができる木炭⁽²⁾を使用し天

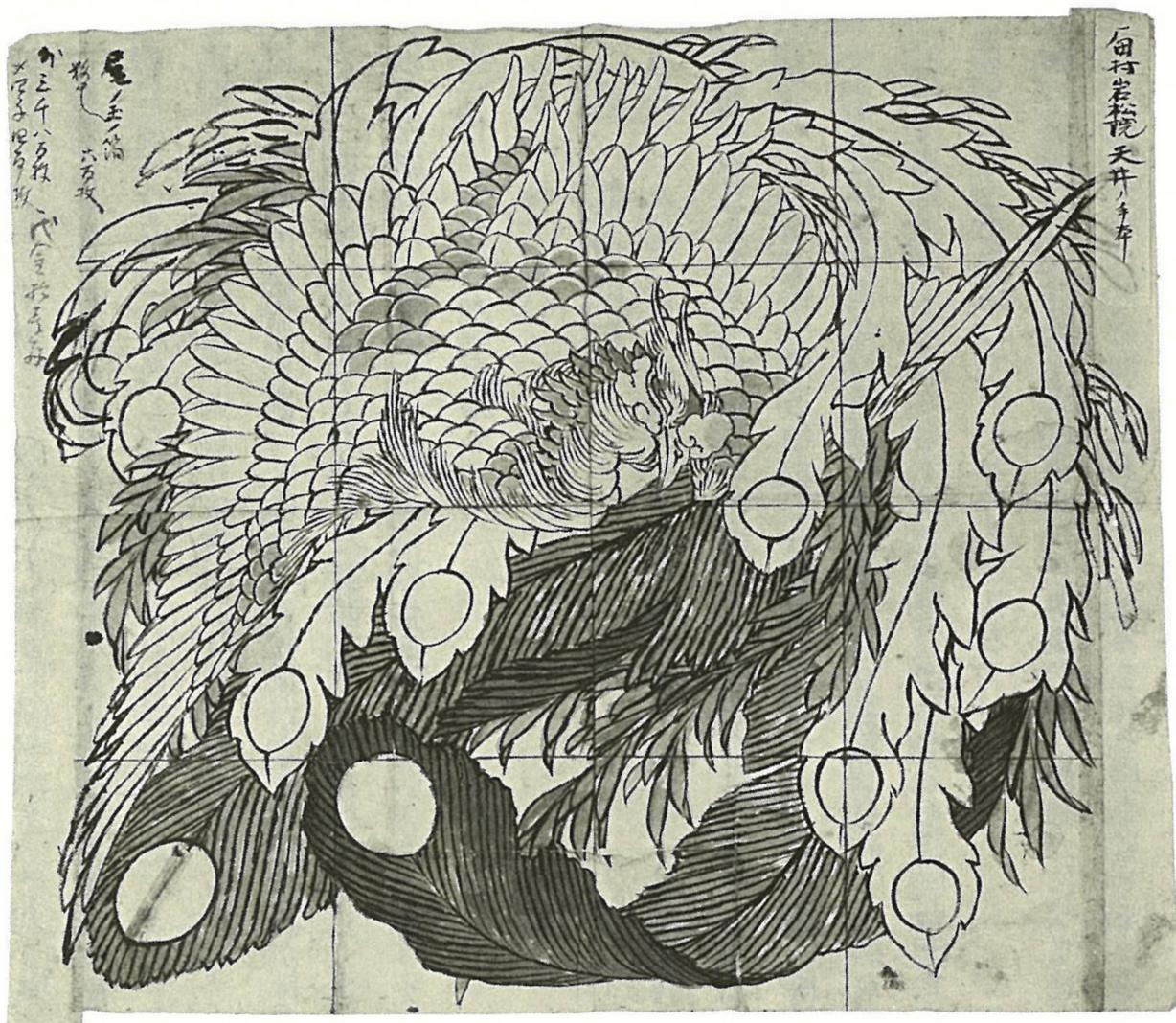


写真1 鳳凰図中下絵 (個人蔵・北斎館寄託)

井板に直接描いて仕上げたと推測される。この他の描き方として、「原寸大の鳳凰図下絵を紙に描き、それを画面に重ね、間に念紙(カーボン紙のようなもの)を挟み、下絵の輪郭線を鉄筆でなぞり画面に図柄を写す」方法はあるが、大画面では線のズレが生じ易く線の勢いや力が伝わりにくい。ダイナミックな鳳凰図の制作には適さないと筆者は考える。

⑥ 木炭の線描を墨でなぞり図柄を描く(骨描き)。墨が乾いた後に乾いた刷毛や布きんで木炭を払い落とす。

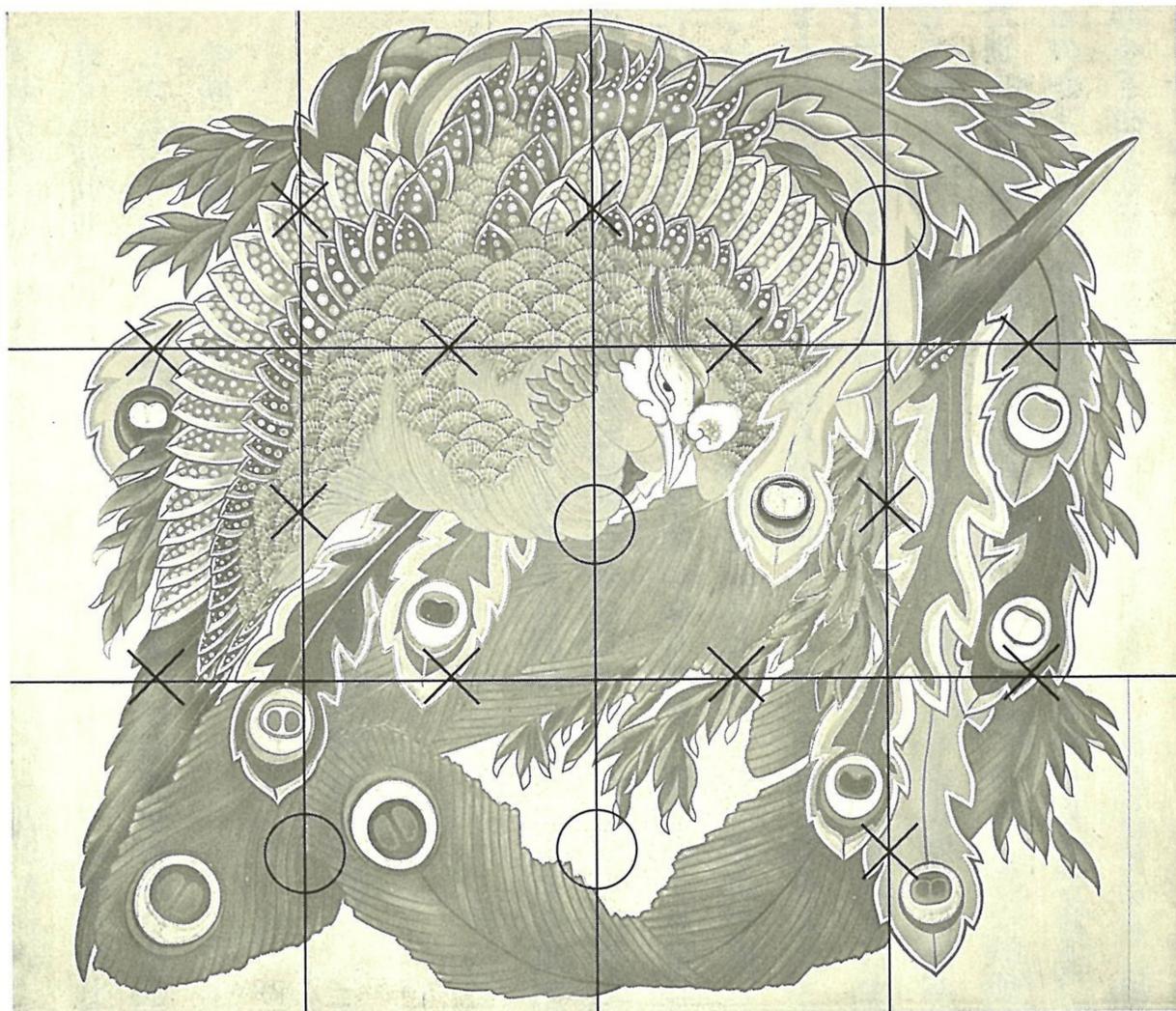


図1 天井絵の接合箇所

○印は図柄が繋がっている箇所
×印は図柄がずれているまたは彩色が若干異なる箇所

⑦ 墨の骨描きが透けて見える程度に白土下地を塗る(鳳凰背景の白土下地の下に骨描き線が見える)。

⑧ 顔料を膠水で練り溶いた絵具で彩色する。分析の結果、使用された顔料は朱・鉛丹・べんがら・石黄または雄黄・岩緑青・べろあい・花紺青・藍蠟・胡粉・墨・金箔で下地は白土と推測された。⁽¹⁾

⑨ 一二区画の板の接ぎ目を観察すると、図柄が繋がっている箇所・ずれている箇所・彩色が若干異なる箇所があり、それらを図1に表示した。彩